

## 圖 版 要 項

## 二二 一 休 禪 師 像

東京 岡崎正也氏藏

紙本淡彩 挂幅装  
 横 畫面 一六・二種 (五寸三分五厘)  
 賛 二六・八種 (八寸八分五厘)  
 横 二六・六種 (八寸六分)

嘗て一休の董住したる洛南酬恩庵には等身の木彫坐像と、諸徒に附與せる紙本著色像並に宗辯に附與したる絹本著色像の三點の一休像を藏するが、就中附與宗辯像は左向七分身の像容と云ひ、面貌は云ふも更なり、衣文の細部に至るまで最もこゝに圖示する岡崎家本と酷似するものである。短髪種々、疎髻を蓄へ、顴骨高く張り、唇薄く大きく、一文字に口を引き緊め、眼の隅より、射る如き瞳を光らせる。言行奇矯苛諫、機鋒峻峭たりし和尚の面目を傳ふること躍如たるものがある。素紙に淡赭を點じ、薄墨の地量を取つて顔面を浮び上らせた手法も、簡素の内に十分の要を掴み、前掲酬恩庵附與宗辯像の稿本かと思はれる、關係にあり、附與宗辯像に比して一段と生采潑々たるものあるを感ずるのは蓋し、本像が恐らくは對着寫照に出づるものならんことを想像せしめる。今此幅は二紙を継ぎ合せ、上方に

華叟子孫不知禪

狂面雲前誰說禪

三十年來肩自重

一人荷擔松源禪

前往大德一休和尚

頂相自贊語謹拜書

と狂雲集にも採録されたる所の自贊の語を墨齋が著けてゐる。思ふにこの稿本に

よつて酬恩庵本が完成し、稿本は畫者の篋底に藏せられてゐた所像主の示寂に逢うて、追慕の餘その稿本に一休自贊の語を著して先師を偲んだものであらう。尤もこちたき想像を廻らすならば、此本を附與宗辯像の直接の稿本と見ることも別に確證あることではなく、或は共通の稿本から各々別途に完成せられたと見ることも不可能ではなく、又この畫を墨齋筆とすることも他に證馮を缺き甚しきに至つては賛語の筆者としての墨齋を否認せんとする聲もあるやに聞く。然りと雖も本圖を精鑒するに、上下二紙に分たれてゐること、畫紙の極めて短かく餘白少きことは之を稿本と考へて初めて自然に解釋せらるゝものであり、賛の書風は眞珠庵藏墨齋筆山水圖自贊に比するに、謹直を以て勝り、畫の筆者に至つては之をしも墨齋に擬するや否やは最も問題の存する所であらうが、恐らくは曩に一言した如く墨齋自藏の稿本に自ら著賛したと考ふことが最も自然にして且眞に近きものではあるまいか。

## 二 西 湖 圖

東京 畠山一清氏藏

紙本墨畫 挂幅装  
 横 四六・六種 (一尺五寸四分)  
 賛 八四・八種 (二尺八寸)

本圖は古來雪舟の作と傳へ來りたるも、其の畫風上より見て此の傳稱に信を措き難く、しかも圖の左上方に「杭州西湖之圖於北京會同館作此圖弘治玖年閏三月拾三日」との文あり、弘治九年(丙辰)は即ち、我明應五年、雪舟七十七歳の時に相當し、當時彼が明に再遊したと云ふことは他の證徴の上よりも考へ得ず、以て本圖の作者を雪舟に擬することは當らないと思はれる。即ち雪舟の入明は應仁元年、歸朝は文明元年と推定せられ、明應年中は既に老齡にて、且、明應四年宗淵に與へたる破墨山水圖、同五年には齋年寺の惠可斷臂圖等の制作あり、旁々彼の再入明説は肯定し得ぬ所である。しかし、本圖の作風より見て、これが雪舟の門弟の何人かによつて描かれたるものなることは信じ得べく、近時之を以て雪舟の高足等觀秋月の筆に擬する説がある。即ち其の説の論據とする處は、本圖が雪舟よ

一  
休  
宗  
純  
像

東京 岡崎正也氏藏